

氏 名	莊加 直子
学 位 の 種 類	博士（学術）
学 位 記 の 番 号	甲第 212 号
学位授与年月日	2018（平成 30）年 9 月 14 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	「慶長小袖」の成立に関する史的研究
論 文 審 査 委 員	主査 森 理恵 （生活環境学専攻 教授） 副査 大塚美智子 （生活環境学専攻 教授） 副査 細川 幸一 （生活環境学専攻 教授） 副査 丸山 伸彦 （武蔵大学人文学部 教授）

論 文 の 内 容 の 要 旨

第 1 章 序論

現在、服飾史や染織史・美術史の分野において、「慶長小袖」と呼ばれている染織作品群がある。日本の「着物」の前身である「小袖」の歴史上で重要な位置を占めるとされ、概説書や美術展覧会でも、しばしば取り上げられる作品群である。通常、「慶長小袖」に分類されるのは、近世初期に製作された小袖類のうち、綸子地で、黒紅・紅・白で染め分けられ、繡箔（刺繡と摺箔）、鹿の子絞りなどの技法を用いて製作された作品である¹。典型的な「慶長小袖」の一例として、「重要文化財染分綸子地御所車花鳥文様繡箔小袖」（図版 1）がある。ただし、3 色の地色の中の 2 色あるいは 1 色のものも「慶長小袖」に分類されることがある。



図版 1 重要文化財 染分綸子地御所車花鳥文様繡箔小袖
松坂屋コレクション

ところが、そのような重要な位置づけの作品群ではあるが、先行研究において「慶長小袖」は、小袖の様式の一つでありながら、近世初期の慶長年間（1596～1615）に製作されたことを意味するものではないとされる²。これはいったいどうしたことであろうか。なぜ「慶長」という語が使われているにもかかわらず、慶長期の製作ではないと論じられるのであろうか。これまでの研究においては、その経緯が明らかにされていない。そもそも、「慶長小袖」の定義を含む詳細についてほとんど未解明の状態である。それだけでなく、「慶長小袖」についての定義が定まっていないため、「慶長小袖」という用語が指し示す染織品が研究者によりまちまちである。

そこで本研究では、「慶長小袖」という小袖様式概念がどのように始まり成立していったのか、そしてその語の使用がどのような問題をはらんでいるのかについて明らかにすることを目的として、明治時代から現在にいたる服飾史・染織史の研究史を解明する。なお、服飾史・染織史の研究史についての先行研究はたいへん少なく³、とくに「慶長小袖」に関するものは皆無である。

研究方法は、明治期から現在までにいたる関連分野の研究書、定期刊行物、新聞、官報、社史、展覧会図録・作品集、講演記録、講義集、染織品を掲載した図書など約 2,000 点に当たり、関連記事を収集し、分析をおこなった。

第2章 いわゆる「慶長小袖」と実際に慶長年間に製作されたと考えられる小袖

（1）「慶長小袖」の江戸時代の呼称とされる「地無」と「繡箔」

先行研究において、「慶長小袖」は江戸時代には「地無」や「繡箔（あるいは縫箔）」と呼ばれていたとされているが、それらの言葉について詳しく論じられていない。「慶長小袖」とこれらの言葉の結びつきは、戦後の研究者が論文などで紹介をしており、その中で「慶長小袖」は「地無」「繡箔」という言葉と結び付けられていることが多いことが確認できる。しかし、江戸時代の随筆にかかれた「地無」と「繡箔」の意味を、一つ一つ考察していくことにより、「地無」は江戸初期の一部の文献では、練緯の地の染織品を指し、箔を使用しないことも示唆されていることから、「地無」という言葉だけで現在の「慶長小袖」とイコールとはみなし難いことが判明した。また、「繡箔」という言葉は、刺繡と摺箔という技法を意味していることから、その指し示す染織品は「慶長小袖」にとどまらず、比較的、多い。そのため、「地無」と「繡箔」という言葉が重なって、「慶長小袖」の指し示す染織品により近くなるのではなかろうかと考えられる。

（2）実際に慶長年間に製作されたと考えられる小袖

明治39年（1906）に出された『京都美術』⁴第3号に紹介されている「慶長年代染繡裂」には図版と作品解説が掲載され、この裂の色は紫であると紹介している。

さらに、芸艸堂より大正6（1917）年10月15日に『微古帖十』⁵が発刊されている。序・目次・奥付などの文字情報が一切ないものの、様々な工芸品の模写をしていることは確認できる。模写図版から、「慶長裂」は、おそらく黒紅の地色に刺繡と鹿の子紋による染織品であると判断できる。この1点だけで、「慶長裂」の指し示す染織品を確定することはできないものの、なんらかの「慶長裂」に関する考え方があるのではないかと推測できる。また、この時点の「慶長

裂」は現在の黒紅・紅・白に染め分けた「慶長小袖」と呼ばれる染織品ではないことが確認できる。

この2点は、近年、国立歴史民俗博物館の澤田和人が見出した慶長8年（1603）の銘のある染織品として紹介された黒単色の「慶長小袖」に近いものであるため、同じ要素を持ちえた染織品を調査した。結果、「桃山小袖」の形態と、生地が練緯という特徴をもちながら、黒や紫の地色で、摺箔、刺繍、鹿の子絞りといった「慶長小袖」の特徴をもつ染織品を2点見出し、この特徴を持つ染織品の共裂を調査・分類し、紫、黒、紅で各1件、見出した。このことは、現状の小袖変遷にあらたな一様式を付け加えることができる可能性をもっている。

第3章 近代染織・服飾研究史と「慶長小袖」の成立

（1）明治時代

それではなぜ、慶長年間の製作ではないかもしれない小袖類のことを「慶長小袖」と呼ぶようになったのであろうか？そのことを解明するために、本研究では、明治期から現在にいたるまでの服飾史と染織史の研究史をたどった。その結果、明治時代には、慶長年間に製作されたと考えられる染織品について、東京と京都で大きな認識の違いがあったことが確認できた。

東京では、国学者の小杉楡邨が、明治35年（1902）に『好古類纂』の中で、染織作品自体の時代判定はしていないものの、2度にわたり慶長期の女性の風俗について論じている。その後、明治41年（1908）に開催された第48回好古会において講演し、「藤原時代」（平安時代）から年代順に女装の沿革を述べた中で「慶長、元和、寛永」の小袖について述べている。

其小袖にも、地黒、地赤、などといふ綸子地を染まして、縫ものしたるしたて、又其のうかけの文様、地質など、定りとは有ませねど種々の縫物、金銀箔入のものもありました。⁶

綸子を黒や赤に染め、縫い（刺繍）があり、その上に生地や文様は定まっていなかったが繡箔の打掛を着用していたという、この描写はまさに、現在「慶長小袖」と呼ばれている小袖類の特徴に合致するものである。「慶長小袖」という用語は使用されていないものの、東京では、明治30年代（1897～1906）に、そのような染織品が「慶長、元和、寛永」期（1596～1644）の小袖であると研究者の中で認識をされ始めたことがわかる。

一方、京都では、「京都美術協会」に多くの美術工芸家が名を連ね、過去の遺品の研究を通してより良い製品をつくる努力をしていた。「京都美術協会」から発行された、明治39年（1906）の『京都美術』第3号⁷に、「慶長年代染繡裂」と題して図画と解説が掲載されている。解説には次のようにある。

○慶長年代染繡裂

某君所蔵

此裂某家に傳へ瑞泉寺の襲藏と比較對照して慶長年代の所製と認むる所なり、地は撰糸の

優等品にて濃紫に六瓣花を置き扁額を散布す、是亦岩佐又兵衛筆と僞する古畫に往々見る處の模様にして其時代を認むる一證ともすべきなり、纈纈を染法に施こし額縁及び菊花を刺繡とす、染繡相俟ち當時の光彩陸離たるを想像さるゝものなり。

この解説によると、他の裂(瑞泉寺裂)と比較検討し、慶長時代の裂であると判断したという。裂の模様についても触れ、岩佐又兵衛の絵に同じ模様が描かれているので、それを時代判定の根拠にしたという。岩佐又兵衛は近世初期に活躍した絵師である。裂を見て描いたと思われる図画は白黒図版であるが、鹿の子紋りが扁額の形に並んでおり、菊花と六弁花と葉の形が白抜きとされ、菊の葉と扁額の輪郭に刺繡の描写かと思われるような細い線が描き込まれている。この『京都美術』に掲載されている「慶長年代染繡裂」が現存する染織品の何れに当たるのかは特定できないものの、纈纈(鹿の子紋り)の技法を使用して紫を染め、額と花の模様刺繡を使用していることがこの文献により確認ができ、明治39年(1906)ころの京都における、染織品の時代判定のなかでの「慶長頃」の捉え方がわかる。よって、京都でも、明治30年代には「慶長頃」の染織品に対する概念が確立していたと考えられる。

以上をもとに考察すると、明治30年以降に生み出された「慶長頃」の染織品の概念は、東京と京都で大きく異なっていた。すなわち、東京では綸子を黒や赤に染め、刺繡をほどこしたり、または、生地や文様は定まっていなが繡箔をしたもの、という捉え方であり、京都では紫の鹿の子紋りに刺繡をしたもの、という捉え方である。

このことが、おそらく、その後、昭和戦前期までの染織・服飾研究における、東京と京都の「慶長小袖」や「慶長期」の染織品のとらえ方の違いに影響を与えたのではなかろうかと考えられる。

(2) 大正時代

大正時代には、『綾錦』⁹をはじめ多くの染織品を掲載した書籍が出版されたが、これらに掲載された染織品の時代判定や作品名称などはバラバラで統一性がない上に、染織品の所蔵者の時代判定をそのまま掲載していると考えられる書籍も多かった。そのため、一冊の書籍のなかでも時代判定を含んでいると考えられる「慶長時代小袖」などの言葉と、その言葉により紹介される染織品は統一されていなかった。一方で、染織品の書籍には、カラー写真が使われ始めるようになった。現在、典型的な「慶長小袖」とされている、文化庁所蔵の重要文化財「小袖〈繡箔風景四季花文〉」は大正15年(1925)には、図案家の田村春曉が所蔵しており、「慶長時代小袖」として紹介されていた。

(3) 昭和前半期

その後、昭和時代に入り、少しずつ、慶長時代の製作と判定される染織品が統一されるようになっていく。昭和4年(1929)、やはり現在、典型的な「慶長小袖」として重要文化財に指定されている作品の一つ「染分綸子地御所車花鳥文様繡箔小袖」は、刺繡作家の岸本景春の所蔵品として『綵霞帖』¹⁰に、「徳川時代初期慶長頃」と掲載されている。

また、東京では、服飾史研究者の永島信子による昭和8年(1933)の『日本衣服史』¹¹などの中で、現在、典型的な「慶長小袖」とされる黒紅・紅・白の地色の染織品が、「慶長時代」の小

袖であると記述されるようになる。

大正時代には地色が黒の単色の染織品を「慶長時代」とし、黒紅・紅・白に染め分けた、現在、典型的な「慶長小袖」とされる染織品を「寛永時代小袖」としていた、美術研究家・古美術商の野村正治郎も、昭和 13 年（1938）に発刊した『時代小袖雛形屏風』¹²では、同じものを「慶長時代小袖」としており、時代判定に変化が生じている。

このように、昭和10年代に、東京の研究者により監修された染織をテーマにした書籍においては、明治30年代に小杉楹邨が示唆した、地色が黒と赤の綸子のものを「慶長時代の小袖」であると、統一して認識するようになった。

一方、同時期の京都では、風俗研究家の江馬務や日本画家の吉川観方などが、慶長年間を桃山時代に組み込み、慶長期に製作されたものを桃山時代の染織品であると位置付けていた。そのため、「慶長小袖」という言葉は、京都の研究者が監修する書籍などで使用されることはなかった。

さらに、昭和 10 年（1935）頃から、京都の染織研究家の明石染人は、黒紅・紅・白に染め分けた、現在典型的な「慶長小袖」とされる染織品は「慶長頃」の染織品ではなく、そのなかには「寛文頃」のものが含まれているとし、「慶長頃」の作品はむしろ、紫や黒の地色のものであると論じている¹³。すなわち、「慶長頃」に実際に製作された染織品は、明治時代に京都で考えられていたような黒や紫のものであることを示唆している。さらに、黒紅・紅・白に染め分けた染織品には「寛文頃」のものが含まれているという、現在の「慶長小袖」の概念の基礎につながる考え方がここで登場したのである。

（４）昭和後半期～平成期

東京国立博物館の今永清士、山辺知行、北村哲郎を含む、昭和後期から平成にかけての研究者たちの多くは、上記の明石染人の考え方を踏襲し、「慶長小袖」は慶長期に製作されたものではないと考え、述べるようになった。その一方で、明石染人は「慶長頃」の染織品を黒地のものとしていたので、言葉の指し示す染織品が研究者によりばらばらである今日の研究状況につながっていると考える。「慶長期」を小袖の様式区分のどこに入れるか、桃山時代なのか江戸時代初期なのかについても、研究者による統一見解がなく、まちまちであった。特に京都では、桃山時代とされることが多かった。

そのようななか、平成20年（2008）に、澤田和人は新出資料として、慶長 8 年（1603）の銘のある「菱鶴丸草花模様等古幡残欠」を展覧会「[染]と[織]の肖像—日本と韓国・守り伝えられた染織品」で展示した¹⁴。澤田によればこの裂は、生地は練緯であり、小袖の形態ではないので断言することは難しいが地色は黒である。また、刺繍が確認されている¹⁵。このようなものが本来の慶長期の作品であるということになる。

一方、平成 24 年（2012）、東京国立博物館の小山弓弦葉は著書『「辻が花」の誕生〈ことば〉と〈染織技法〉をめぐる文化資源学』のなかで、慶長 15 年（1610）に没した「妙徳尼像[後藤徳乗夫人像]」について次のように述べた。

後藤徳乗（天文十七年〈一五四八〉—寛永八年〈一六三一〉）は幕府の大判座の役人で代々

室町幕府に仕える彫金師の家柄で、秀吉に重宝された。その夫人の肖像に慶長十五年（一六一〇）に没したという賛が入る。（中略）武家女性で慶長年間の例である。（中略）技法としては刺繍と金箔で模様を表した縫箔と呼ばれる慶長年間の衣裳である。現在では、黒・紅・白で複雑な染め分けを施し、吉祥模様を主題とする細かい刺繍模様と金摺箔による模様で地を埋め尽くすように模様を表した江戸時代前期の地無小袖を「慶長小袖」と称する慣例があるが、本来はこのデザイン様式こそが慶長期の武家女性が着用した縫箔の様式であり、「慶長小袖」と呼ぶにふさわしいものであろう。¹⁶

この像に描かれているのは、小山が「辻が花」を6つに分類したなかの1つである茶色（あるいは紫色）の地色に段を表したり、扇面や円、短冊などを散らしたデザインに分類した小袖である。小山は、このようなものこそが慶長期に製作された小袖と「呼ぶにふさわしい」と主張する。筆者は、慶長期の染織品の研究に新局面を切り開く、澤田や小山の見解に同意し、「三龍胆車に草花文様振袖」（法隆寺所蔵）、「紫地段花菱円文散草花模様縫箔小袖」（平野美術館所蔵）ほか、現存する数種類の小袖裂を慶長年間の製作と推定した。これらの作品群は、明治時代以降の小杉楡邨により生み出された「慶長小袖」の概念ではなく、京都で言われてきた「慶長小袖」の概念にこそ当てはまるものである。

（５）「慶長小袖」という言葉の成立

「慶長小袖」という言葉の文献上での初出は、昭和8年（1933）、百貨店松坂屋上野店発行の冊子『秋の流行』である。図版1の小袖がカラー図版で紹介され、次のような説明が添えられている。

慶長小袖 御幸模様 當店所蔵

綸子地に摺箔の得も云はれぬ味と、精緻を極めた刺繍の細かい模様。慶長小袖として衣裳の完全な形に現存するもの僅に二三に過ぎぬうちの一つ、まことに得難い名品です。¹⁷

当時の服飾史・染織史の研究状況を考慮すると、この冊子を製作するにあたり、松坂屋上野店の製作担当者へ帝室博物館あるいは東京美術学校などの周辺の研究者が助言して、「慶長小袖」という言葉が使用されることとなったと考えるのが妥当である。

しかし、その後、再び「慶長小袖」という言葉が文献上に登場するのは、約30年後の昭和39年（1964）、今永清士の論文「重要文化財染分四季花鳥模様縫箔小袖」¹⁸である。今永はこの論考の中で、綸子地を黒紅・紅・白に染め分けて繡箔を施した小袖を「慶長小袖」と定義している。その後、昭和41年（1966）、山辺知行の論考でも、同様の定義がおこなわれている。そのことから、昭和30年代以降、染織研究者の間で「慶長小袖」について、生地は綸子で、黒紅・紅・白に染め分け、繡箔の技法を駆使した染織品であるという共通認識があり、染織品の用語として定着していたと推定できる。

第4章 結論

本研究では、明治時代以降の染織・服飾研究史をたどり、「慶長小袖」という言葉が、現存する特定の染織作品群と結びつけられていく過程をあきらかにした。さらに、本来、慶長期に製作された染織品がどのようなものであったかということについて、他の研究を参照しながら考察をおこなった。

以上のことから、次のように結論づけることができる。明治時代に東京の研究者たちが「慶長時代の小袖」と考えた作品群はその後、昭和時代に入って「慶長小袖」と呼ばれるようになった。しかしそれは、明石染人がすでに昭和前半期から示唆し、その後の研究者も控えめに述べていたように、実は慶長期に製作されたものではなく、もっと遅い時期の製作品であることが、近年の研究により明確となった。その一方で、明治時代に京都の研究者たちが慶長期の作品と考えて、（彼らは慶長年間を桃山時代とみなしたので）桃山時代に繰り入れた作品群が、現代の研究水準からみると、実際の慶長期の製作品だったのである。文化行政主導で研究がおこなわれていた東京と、染織産業に即した形で研究がおこなわれていた京都との違いであろう。

つまり、国立博物館など文化行政の中心である東京の研究者の強い影響下で用語の定着が見られ、染織品のコレクターたちもそれに従ったが、その間違いは早くから気づかれており、その違和感が昭和後半期になって、「「慶長小袖」は慶長期の製作ではない」、「「慶長小袖」は年号の「慶長」とは関係ない」といった、不可解な言説となって表れていたのである。

1 河上繁樹「慶長時代前期の小袖—慶長小袖から寛文小袖へ—」、『月刊文化財』、228号、第一法規出版株式会社、1982年、27～34ページ。

2 北村哲郎「染織における江戸初期—慶長縫箔考—」、『MUSEUM』、271号、1973年、4～13ページ。

3 和田辰雄『日本服装史』、雄山閣版、1933年、森理恵「「キモノ美人」成立過程についての研究—「日本美術史（染織史）」の形成と日本画、和装界の動向—」、『イメージ&ジェンダー』、3号、2002年、76～95ページ、小山弓弦葉「染織文化史の夢と嘘言説された／描かれた染織のオーセンティシティ」、『美術フォーラム21』、6号、2002年、小山弓弦葉『「辻が花」の誕生〈ことば〉と〈染織技法〉をめぐる文化資源学』、東京大学出版会、2012年など。

4 神坂雪佳編『京都美術』第3号、芸艸堂、1906年。

5 吉川雅喬編『微古帖第1巻』、芸艸堂1914年

6 編者など不詳『好古会記事』、出版年不詳、7ページ。

7 神坂雪佳編集 前掲註4。

8 神坂雪佳編集 前掲註4、15ページ。

9 西陣織物館『綾錦』（全10巻）、芸艸堂、1916年～1925年。

10 岸本景春『綵霞帖』、芸艸堂、1929年。

11 永島信子『日本衣服史』、芸艸堂、1933年。

12 野村正治郎『時代小袖雛形屏風』、芸艸堂、1938年。

- ¹³ 明石染人「慶長時代の染織を語る」、『星岡』、51号、星岡窯研究所、1935年、4～5ページ。
- ¹⁴ 国立歴史民俗博物館で2008年10月15日から11月30日まで開催。
- ¹⁵ 国立歴史民俗博物館『「染」と「織」の肖像—日本と韓国・守り伝えられた染織品—』、2008年、18ページ、および、澤田和人「「染」と「織」の肖像—日本と韓国・守り伝えられた染織品」、美術フォーラム21、19号、2009年、50～55ページ。
- ¹⁶ 小山弓弦『「辻が花」の誕生〈ことば〉と〈染織技法〉をめぐる文化資源学』、東京大学出版会、2012年、135～136ページ。
- ¹⁷ 松坂屋上野店『秋の流行』、1933年。
- ¹⁸ 今永清士「重要文化財染分四季花鳥模様縫箔小袖」、『MUSEUM』、163号、1964年、26～28ページ。

論文審査結果の要旨

慶長年間（1595-1615）は、桃山時代から江戸時代、中世から近世への過渡期に当たり、日本の歴史において、政治経済だけでなく文化的にも大きな転換点であると考えられている。そのような重要な時期に製作され、着装された衣服、とくに小袖については、19世紀末より歴史学や美術史学の研究者、古美術商、古美術収集家、染織産業従事者たちが研究をおこない、解明を進めてきた。しかしながら、いまだに、学界内で一致する見解が得られておらず、「慶長小袖」と呼ばれる染織作品群についても、それが本当に慶長年間に製作されたものであるのかどうか、諸説があり、混乱が続いている。また、この時期の服飾や染織がどのように研究されてきたのかという、研究史についても未解明の状況である。

本研究は、上記のような研究状況を受け、現在「慶長小袖」と呼ばれている染織作品群が、なぜそのような呼ばれるようになったのか、そして、慶長年間とその前後の期間に製作されたと考えられる染織品が、これまでどのように研究されてきたのかを明らかにするものである。関連分野の研究書、定期刊行物、新聞、官報、社史、展覧会図録・作品集、講演記録、講義集など約2,000点の文献を収集し、それらを分析することによって、19世紀末から現在までの染織・服飾研究史をたどり、「慶長小袖」という言葉が、現存する特定の染織作品群と結びつけられていく過程を明らかにした。同時に、慶長年間に実際に製作された染織品がどのようなものであったかということについても、先行研究と実作品を検討し、あらたな見解を導きだしている。

第1章では、「慶長小袖」の概要をまず示したうえで、先行研究のレビューをおこない、「慶長小袖」について解明すべき問題点をまとめ、最後に本論文の構成を説明している。

第2章では、まず、現在「慶長小袖」と呼ばれている染織作品群について検討し、次に、「慶長小袖」の江戸時代の呼称であるとされる「地無」「繡箔」について、江戸時代前期・中期・後期の文献に当たり、必ずしも現在の「慶長小袖」の意味する内容と同一ではないことを実証して

いる。

第3章では、19世紀末から現代までの染織・服飾研究の研究史を、膨大な文献資料から明らかにしている。東京では、好古社と集古会が重要な団体であり、主要人物は、東京美術学校教授であり日本女子大学校でも授業を受け持っていた小杉楹邨（1834～1910）であったことをつきとめている。また京都では、京都美術協会が主要な団体であり、研究者だけでなく、着物の図案家やコレクターも重要な役割を果たしていたことを明らかにしている。

そのなかで、とくに、20世紀初頭に東京の研究者たちが「慶長時代の小袖」と考えた作品群がその後、1930年代に「慶長小袖」と呼ばれるようになったこと、しかし20世紀初頭には、京都の研究者や製作者たちからは異なる見解が示されていたことを明らかにしている。そして、検討の結果、20世紀初頭に京都の研究者たちが慶長年間の製作と考えていた染織作品群こそが、実際の慶長年間の製作品であるという結論を導きだしている。

第4章では、第1章で導きだされた解明すべき問題点について、改めて研究結果を整理して総括し、さらに、本研究の成果を次の4点にまとめている。すなわち、(1) 現在「慶長小袖」と呼ばれている染織作品群が慶長年間の製作であると、最初に唱えたのは小杉楹邨であり、時期は1902年からである、(2) 20世紀初頭に京都で慶長年間の製作と考えられていた染織作品は、小杉の考える「慶長小袖」とは大きく異なっているが、(3) 実際には京都での考え方の方が正しいと考えられる、(4) 東京では文化行政の主導の下、学識者を中心に研究がおこなわれていたが、京都では染織産業に携わる工芸家が染織・服飾研究にたずさわっており、このことが見解の相違につながったと考えられる、という4点である。そして最後に、今後の課題を述べている。

以上のように、本研究は、これまで未解明であった「慶長小袖」という名称の成立事情やその後の研究史を初めて明らかにしたものであり、極めて重要な研究であることが審査委員会において確認された。ただし、広く文化史上に「慶長小袖」とその研究史を位置付ける視点がやや不十分であること、また、膨大な文献資料の分析を体系的に整理する視点がやや足りないこと、さらに、研究成果が現代の衣生活と社会にとってどのような意味を持つのかについても積極的に考察していくべきである、などの点が指摘され、今後の課題とすべきことが確認された。

以上により、審査委員会では、本研究が、テーマの重要性、研究手法の妥当性、分析・考察の的確性、のいずれの点でも高く評価でき、博士（学術）授与に十分に値することが、全員一致で承認された。